

1. カワウの生息状況について

■全国におけるカワウのねぐら・コロニーの箇所数

2019年に全国で確認されたねぐらとコロニーの箇所数は合計566か所で、1998年以降ねぐら・コロニーの箇所数は増加している。ただし、各年で調査している都道府県数が異なっており、さらに年1回など調査回数の少ない都道府県や都道府県内全部のねぐら・コロニーを網羅的に調査していない都道府県があるなど、年ごとには正確に比較できないことに留意する必要がある。

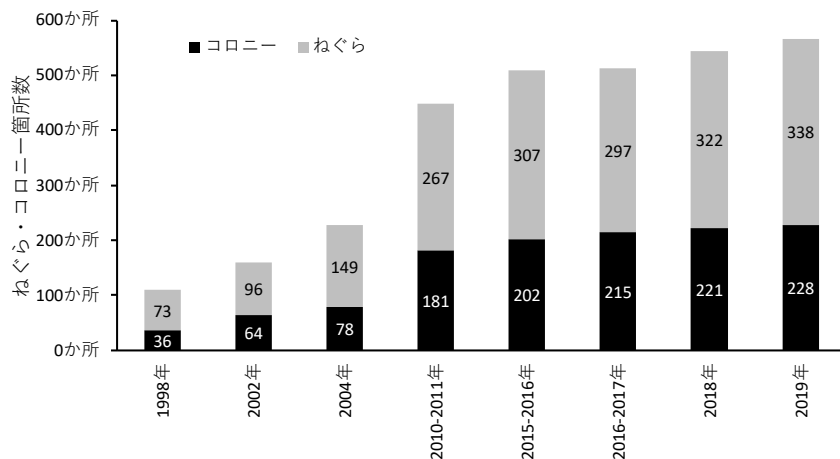


図1-1. 全国のカワウのコロニーとねぐらの箇所数の変化

単年ないしは連続2年の期間で1度でも利用されたことのあるねぐら・コロニーの数をカウントした(調査都道府県が少ない年は連続2年でのカウントとした)。2011年以前は加藤ななえ氏の調査に基づく。以後は、広域協議会が設立している東北、関東、中部近畿、中国四国については、モニタリングデータを使用した。北海道については、鳥類調査の関係者への聞き取りによる情報を使用した。九州と沖縄については、各県への聞き取りによる情報を使用した。

■関東、中部近畿、中国四国、東北カワウ広域協議会のカワウの生息状況

ねぐら・コロニーにおける個体数(以下「個体数」という。)について、成立が古い順に関東、中部近畿、中国四国、東北の各カワウ広域協議会における個体数の推移を図1-2～図1-5に示す。関東カワウ広域協議会では2006年以降大きな個体数の変化はないが、2018年冬期に個体数が増えた後に減少がみられている。中部近畿カワウ広域協議会については、2008年以降、個体数が継続して減少している状況にあるが、2019年春期から増加に転じている可能性がある。中国四国カワウ広域協議会については、調査体制が整ってきた2015年以降、春期と夏期の個体数に大きな変化はみられていないが、冬期の個体数には増加傾向がみられる。東北カワウ広域協議会については、調査体制が整いつつあるが、個体数の大きな変化はみられていない。

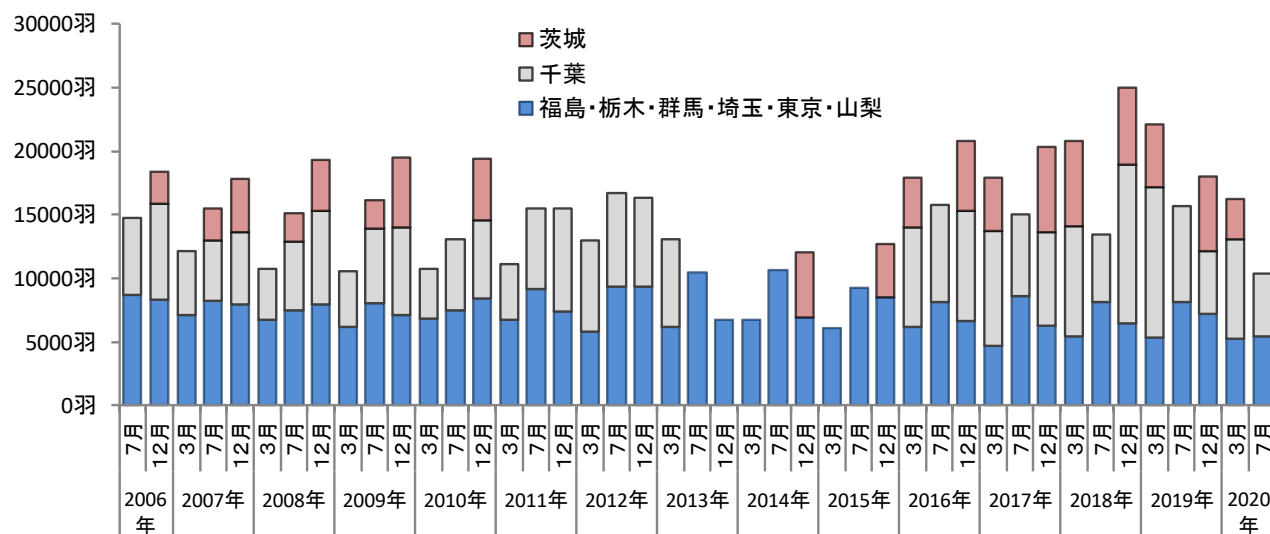


図1-2. 関東カワウ広域協議会で継続的に調査されている都県のねぐら・コロニーにおける個体数の推移。

埼玉県と神奈川県では、全ねぐら・コロニーが調査されていない期間があるが、個体数の多いねぐら・コロニーでは調査が継続的に実施されている。

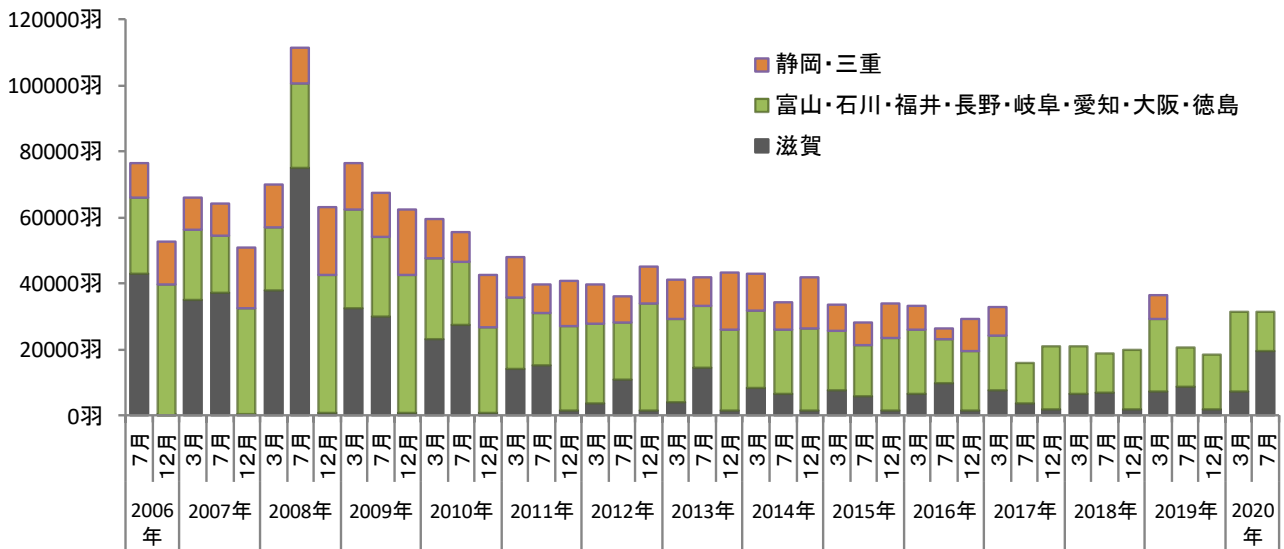


図 1-3. 中部近畿カワウ広域協議会で継続的に調査されている府県のねぐら・コロニーにおける個体数の推移。

岐阜県と愛知県では、全ねぐら・コロニーが調査されていない期間があるが、個体数の多いねぐら・コロニーでは調査が継続的に実施されている。2008年7月期の個体数が一時的に突出して多いのは、この年に滋賀県(調査は9月に実施)で個体数調整が実施されなかったことによる。

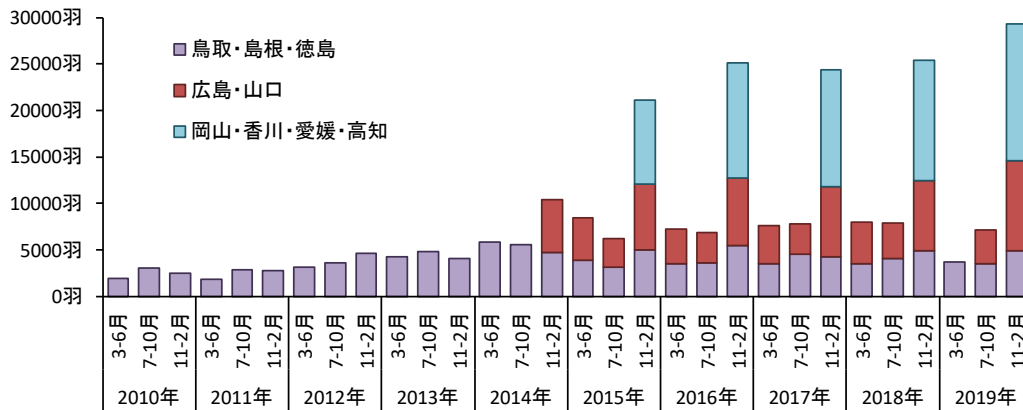


図 1-4. 中国四国カワウ広域協議会で継続的に調査されている県のねぐら・コロニーにおける個体数の推移。

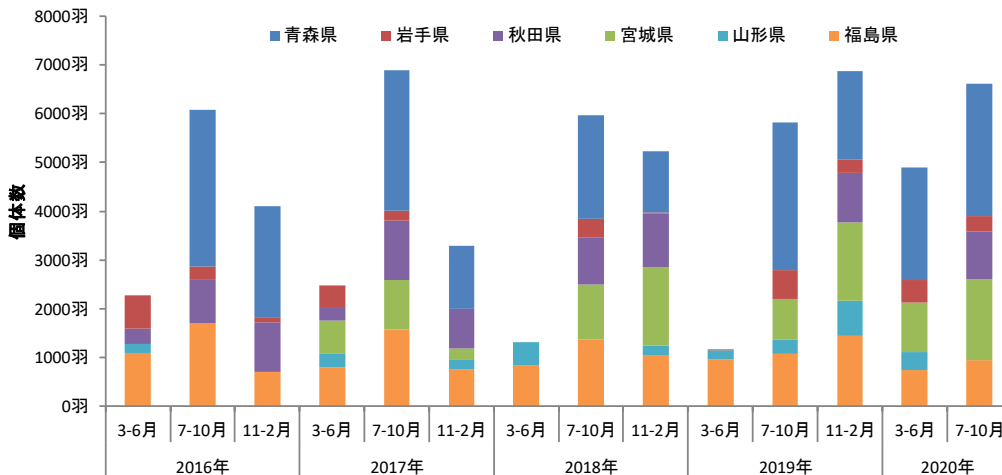


図 1-5. 東北カワウ広域協議会で調査されているねぐら・コロニーにおける個体数の推移。

■水系単位におけるカワウの動向分析

カワウの動向を把握するため、水系ごとにねぐら・コロニーの個体数及び営巣数を集計した。なお水系の規模に応じて、上流と下流を区切って集計した。また、水系として集計できないものは、地域ごとにまとめて集計した。これらの集計結果を地図上に水系ごとのグラフを重ね、夏期と冬期のデータからカワウの季節移動を、春期の個体数及び営巣数のデータからカワウの繁殖状況を捉えた。

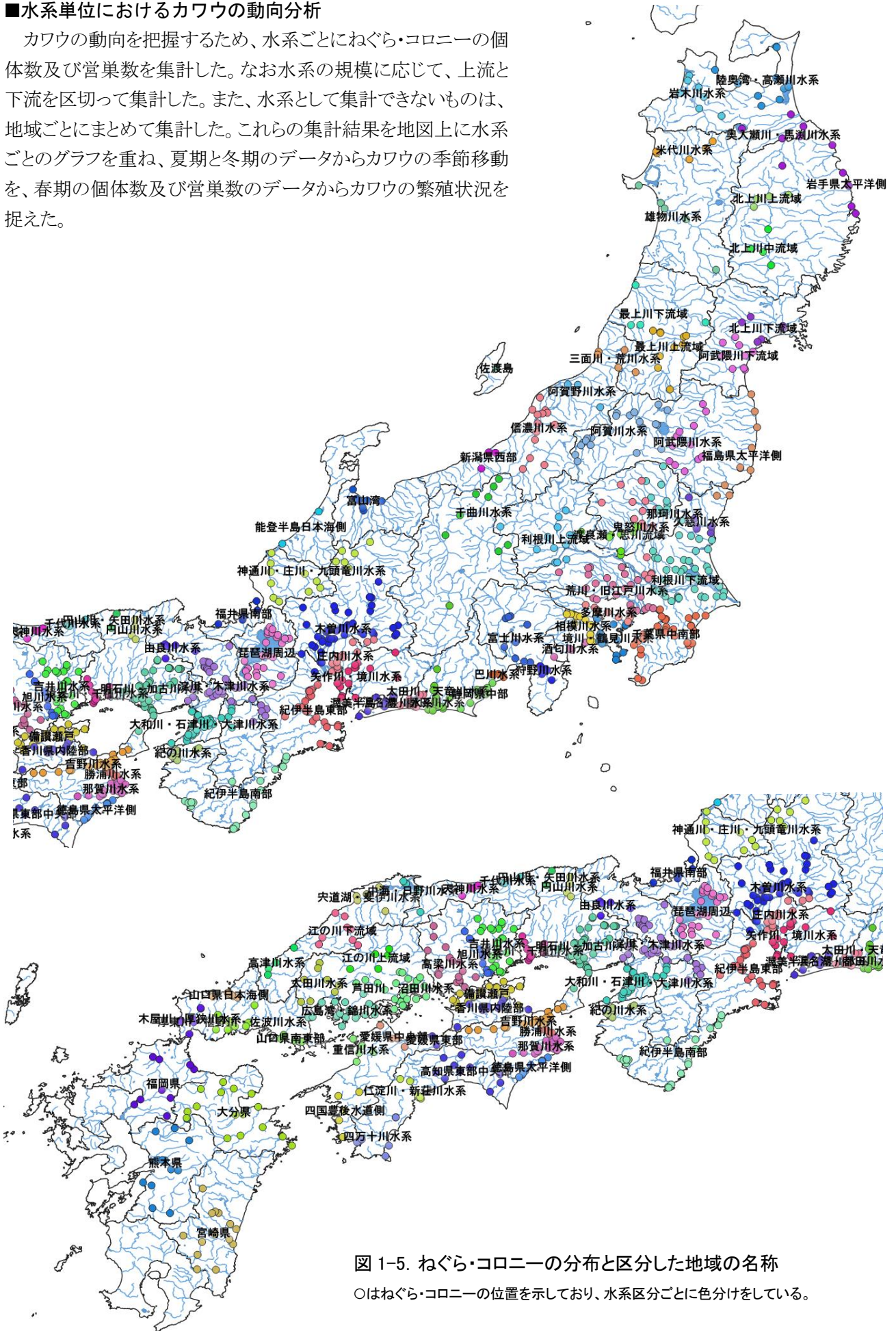


図 1-5. ねぐら・コロニーの分布と区分した地域の名称

○はねぐら・コロニーの位置を示しており、水系区分ごとに色分けをしている。

(1) 水系単位における夏期と冬期のカワウの個体数

2017年冬～2020年夏の期間における夏と冬の個体数を図1-6に示す。カワウの個体数が多いのは、陸奥湾周辺、東京湾周辺、伊勢・三河湾周辺、琵琶湖周辺、瀬戸内海周辺などで、湾や大きな湖がある地域である。

夏と冬の個体数を比較すると、陸奥湾周辺、信濃川水系、木曾川水系、琵琶湖周辺で夏の個体数が多く、伊勢・三河湾周辺と瀬戸内海周辺で冬の個体数が多い(注：茨城県、岡山県、香川県内陸部では、夏の調査が行われていない)。

木曾川水系と琵琶湖周辺で夏の個体数が近年増加しており、瀬戸内海周辺で冬の個体数が増加している水系が多数みられる。逆に、東京湾周辺では、冬の個体数が減少している水系がみられる。

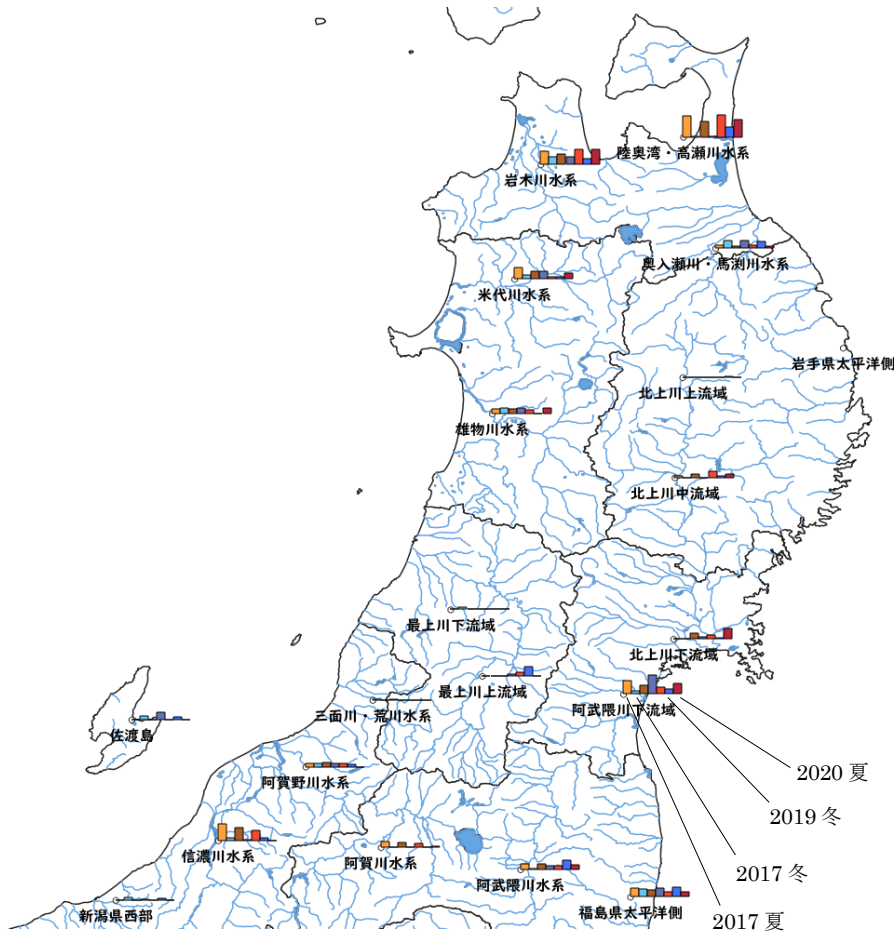


図1-6a. 水系ごとに集計したねぐら・コロニーにおけるカワウの夏と冬の個体数の比較(東北)

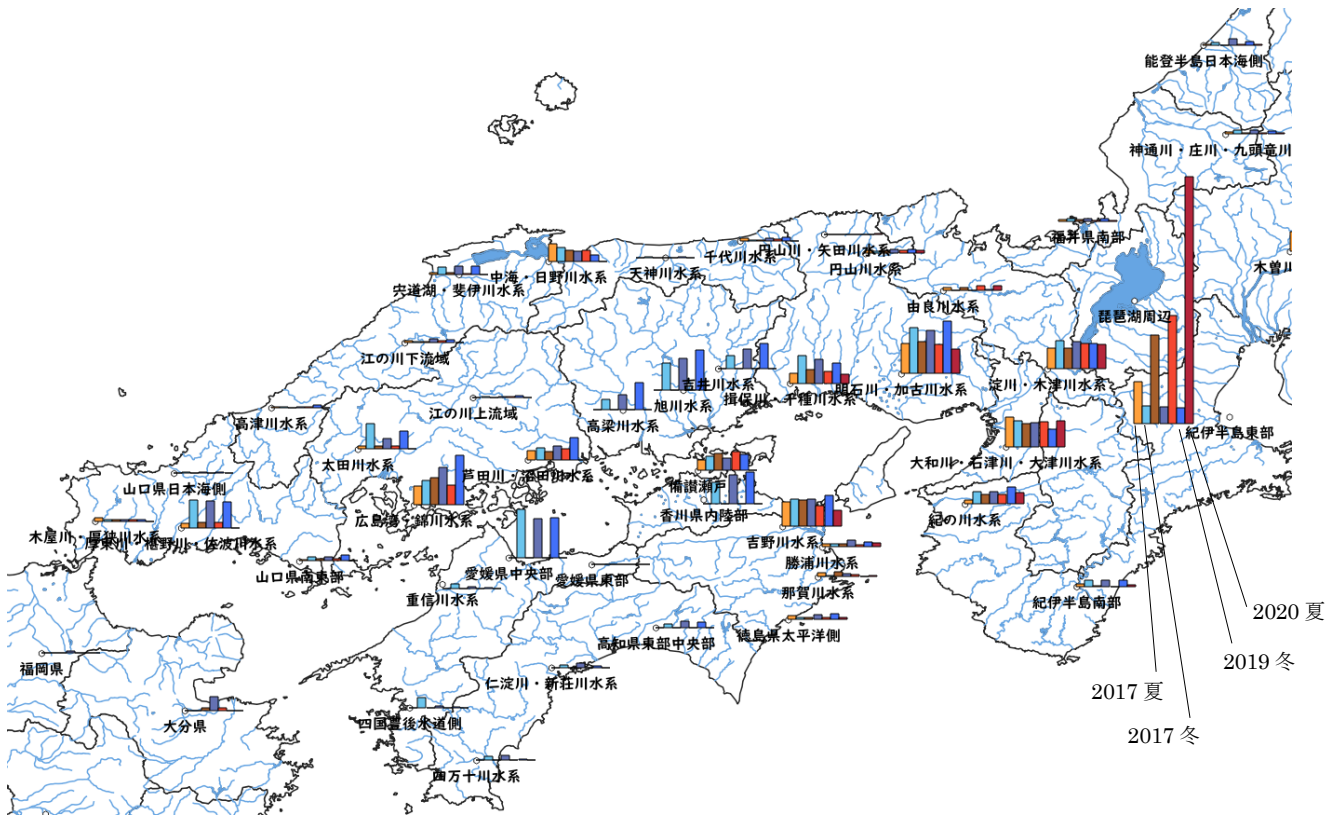


図 1-6d. 水系ごとに集計したねぐら・コロニーにおけるカワウの夏と冬の個体数の比較(中国・四国)

(2) 水系単位におけるカワウの繁殖状況（春）

2016年から2020年におけるカワウの春の個体数を図1-7に、営巣状況を図1-8に示す。春期の調査は主に3月ないしは5月に実施されており、この時期は巣立ち前の営巣数のピーク時期にあたる。この時期の調査は、巣立ち雛が加入する前の成鳥の個体数を表している(3月に調査が実施されている場合、調査後に別のコロニーに移動して営巣する個体もいる)。

各水系における春の個体数と営巣数についても、夏と冬の個体数同様、東京湾周辺、伊勢・三河湾周辺、琵琶湖周辺、瀬戸内海周辺で多い(図1-7、図1-8)。北海道と陸奥湾周辺では春の個体数は十分把握できていないが、営巣数は多い。春の個体数は、利根川下流域、荒川・旧江戸川水系、矢作川・境川水系、吉野川水系で増加傾向があり、千葉県中南部で減少している(利根川下流域では2020年は減少)。近年の営巣数については、明確な増加または減少傾向がある水系はみられない。

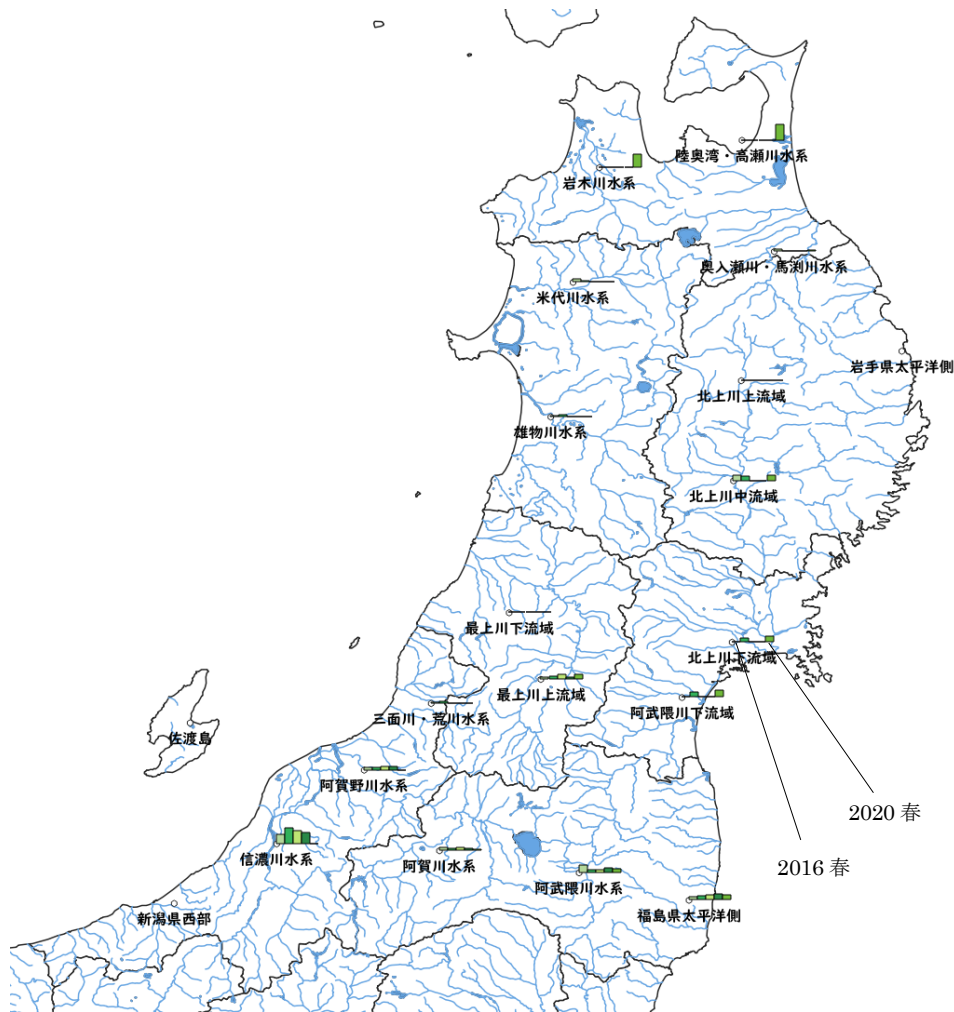


図1-7a. 水系ごとに集計したねぐら・コロニーにおけるカワウの春の個体数の推移(東北)

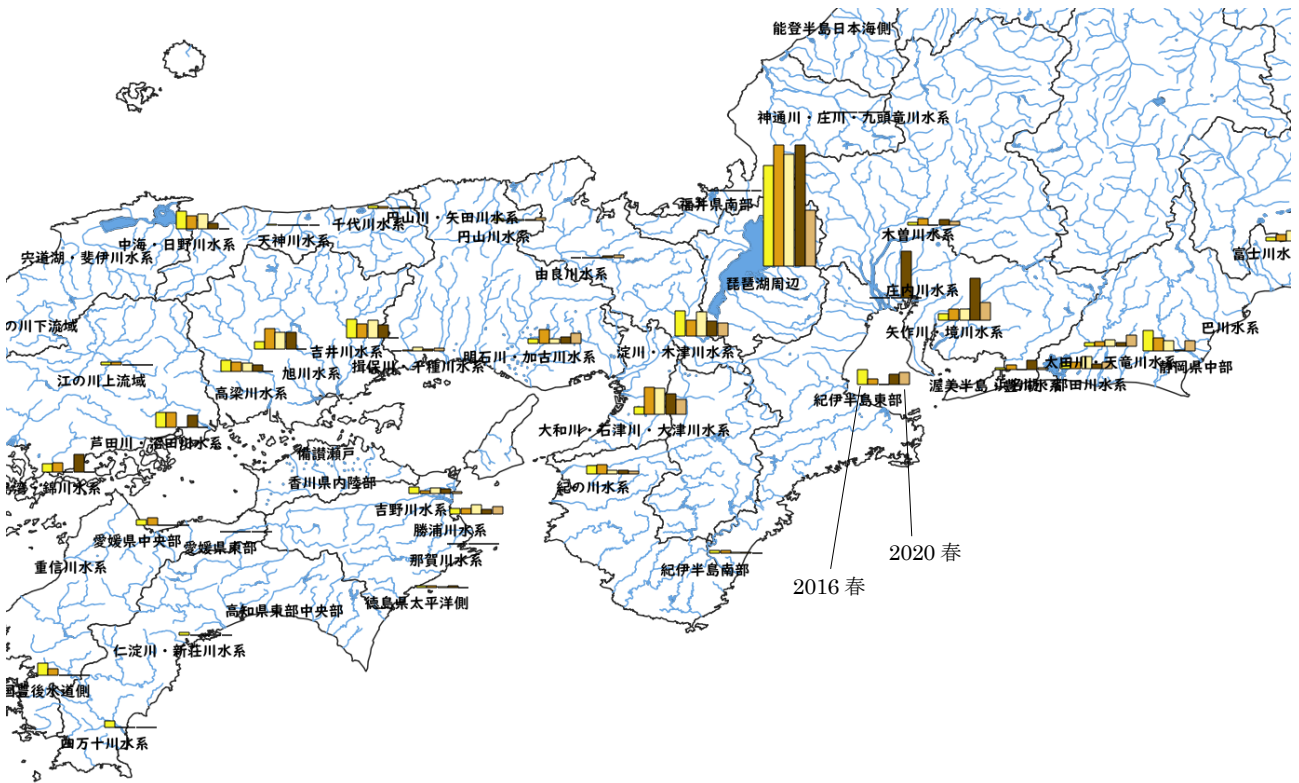


図 1-8d. 水系ごとに集計したねぐら・コロニーにおけるカワウの春の営巣数の推移(近畿)

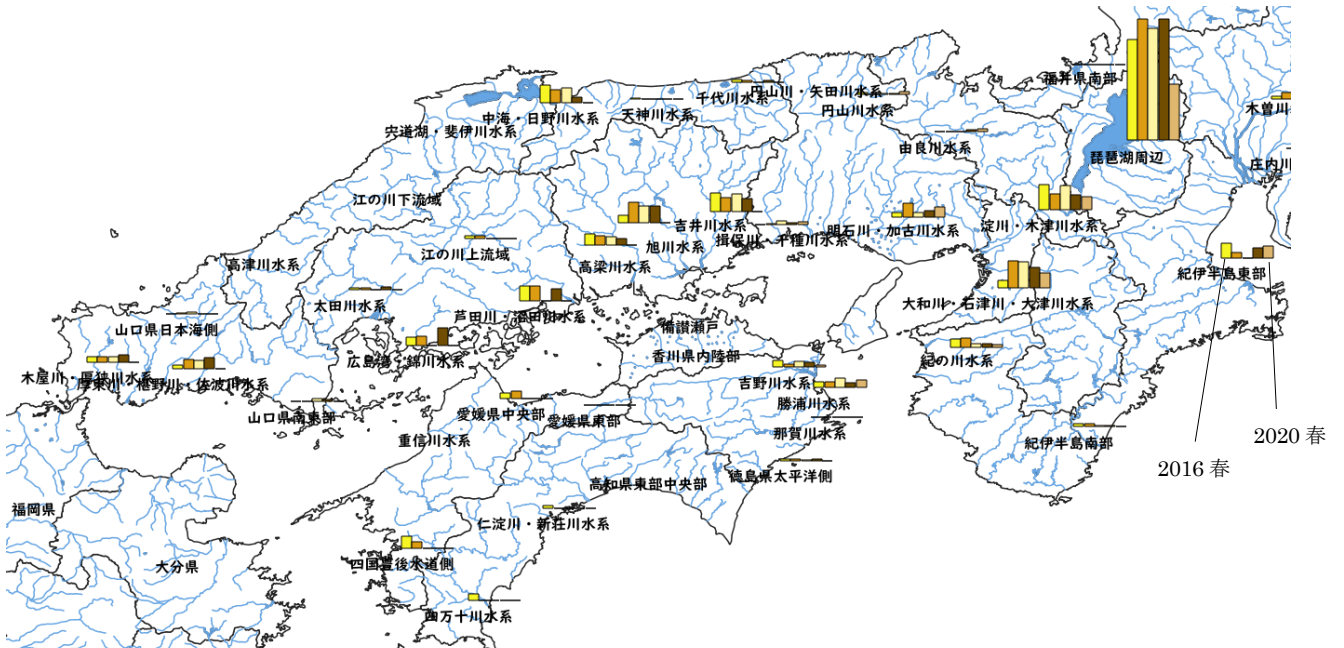


図 1-8e. 水系ごとに集計したねぐら・コロニーにおけるカワウの春の営巣数の推移(中国・四国)

2. カワウの捕獲状況について

鳥獣保護管理法の許可に基づく捕獲数(個体数調整及び被害防止目的による捕獲数の合計。以下「許可捕獲数」という。)及び狩猟による捕獲数(以下「狩猟捕獲数」という。)を図 2-1、図 2-2 に示す。

2018 年度においては、許可捕獲数が 19,059 羽、狩猟捕獲数が 3,162 羽であり、合計 22,221 羽が捕獲された。なお、2019 年度の捕獲数は現在集計中であるが、参考情報として掲載している。

全国における許可捕獲数は、2010 年度にピークを記録して以降、徐々に減少している。全国における狩猟捕獲数については、カワウが狩猟鳥獣に指定された 2007 年度以降、3,000 羽～5,000 羽で推移している。2019 年度は関東で狩猟捕獲数が大きく増加した。

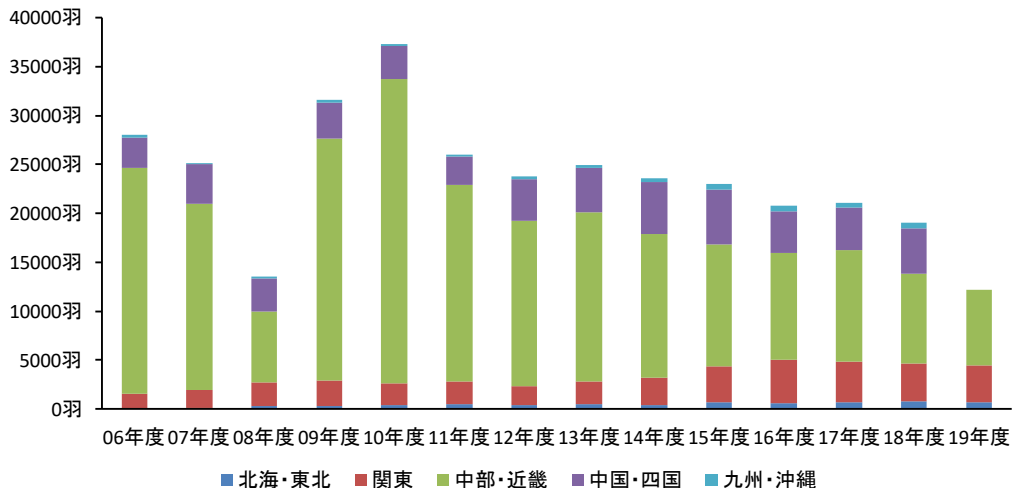


図 2-1. 全国におけるカワウの許可捕獲数の推移
※2019 年度は集計中

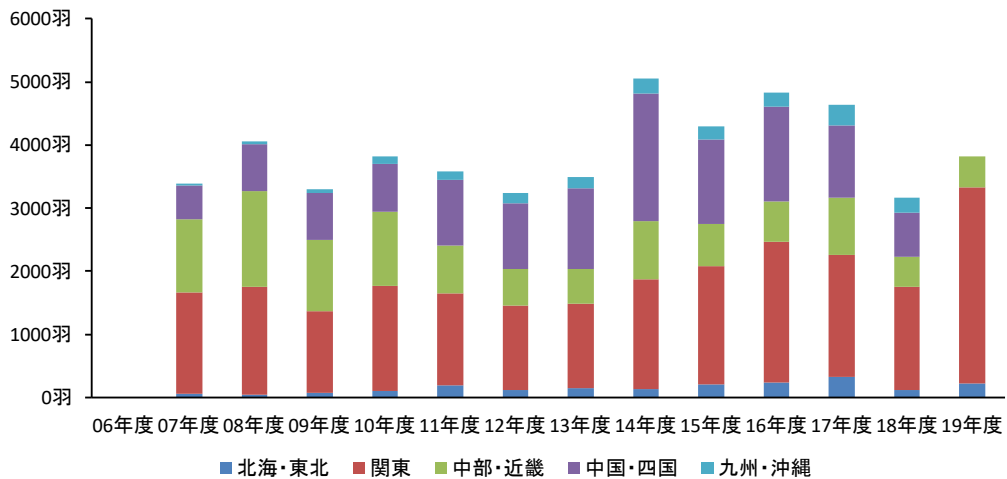


図 2-2. 全国におけるカワウの狩猟捕獲数の推移
※2019 年度は集計中

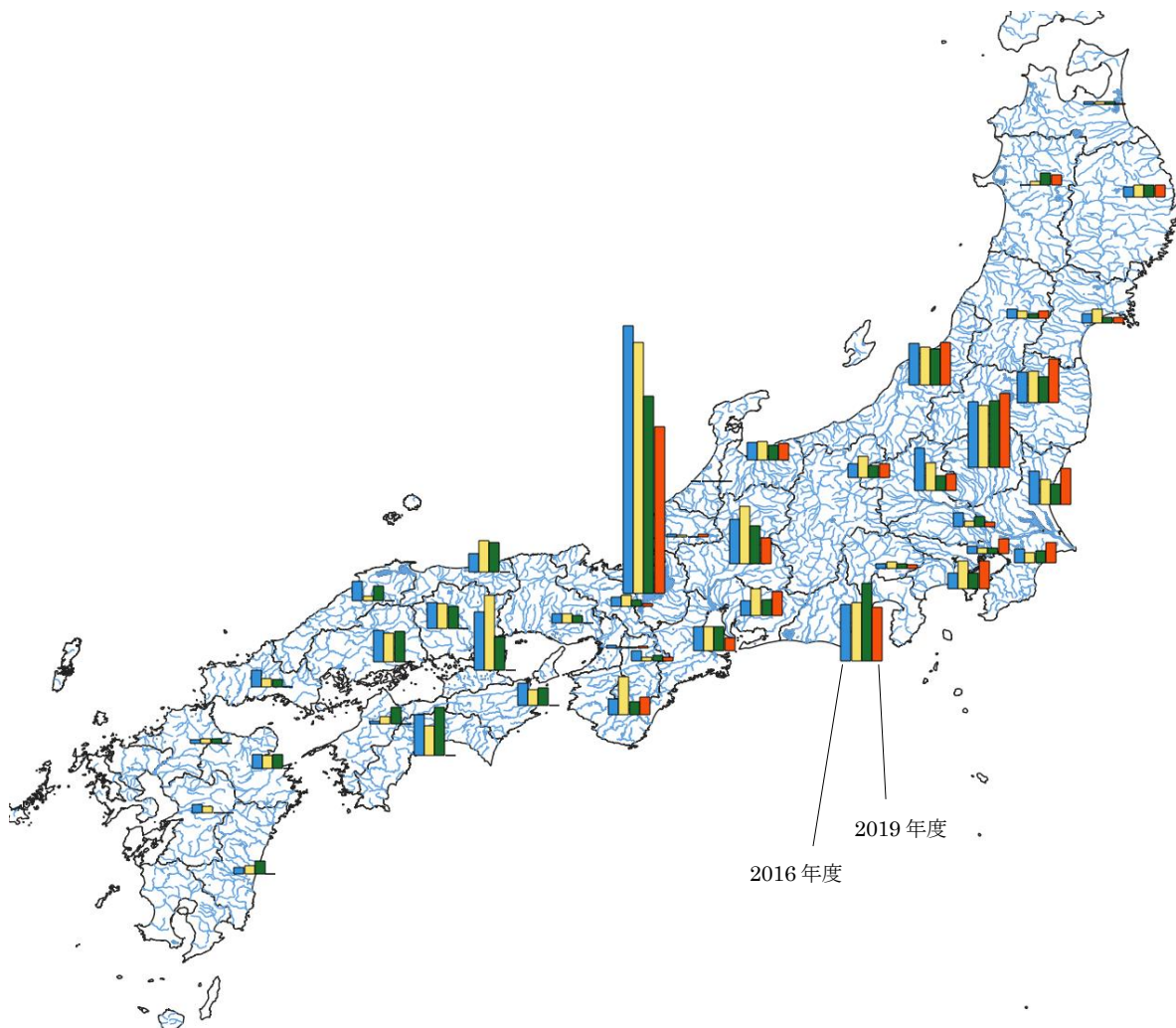


図 2-3. 2016 年度～2019 年度における捕獲数(許可捕獲数及び狩猟捕獲数の合計)の推移(都道府県別)
 ※2019 年度は集計中

3. カワウによる被害状況について

カワウの飛来数は捕食金額の算出の基礎になるものであり、被害の把握の上で重要なデータである。全国の飛来数は、全国内水面漁協協同組合連合会において収集・とりまとめがされているが、調査が行われている漁協がまだ少ないため、全国的な集計はされていない。

飛来数のデータからは、被害の質(被害が起きている場所や時期など)の情報を得ることができる。関西広域連合では、被害地でのカワウの飛来数調査データを漁協から収集し、被害状況の面的な把握を行っている。図 3-1 は、2017 年から 2019 年の 3 年間に漁協から提供された飛来数調査データをもとに作成されたヒートマップ(すべての漁協から調査データが得られているわけではないことに留意する必要がある)であり、これにより琵琶湖から西に飛来数の多い場所が帯状に広がっていることが分かる。

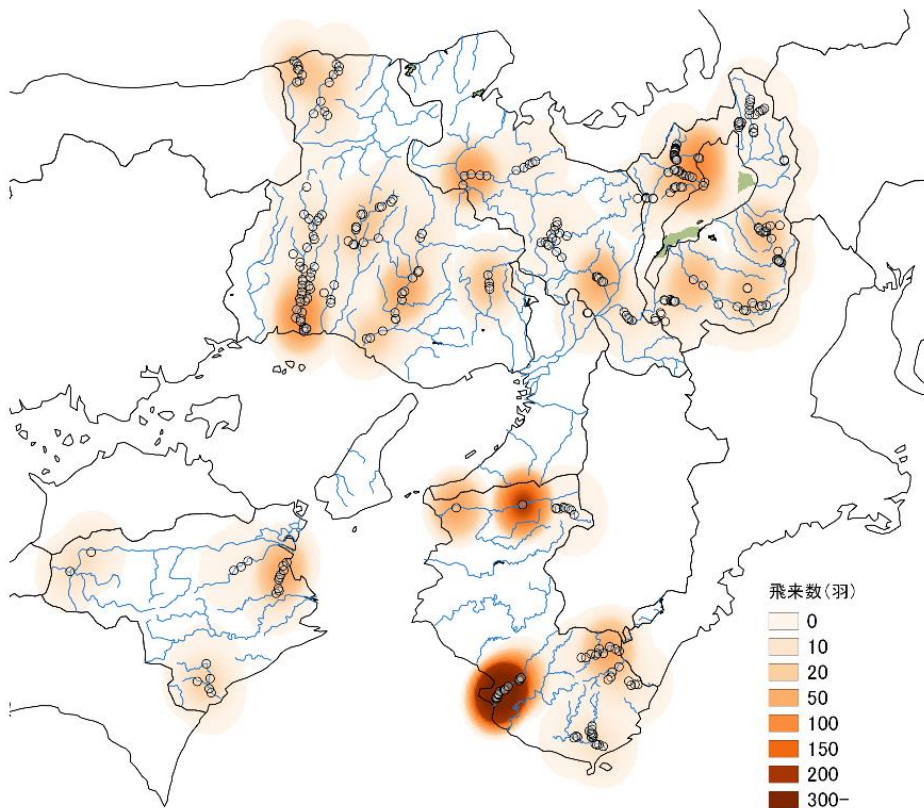


図 3-1. 2017 年から 2019 年の 3 年間の飛来数調査の結果から作成したヒートマップ
(関西広域連合 (2019) 令和元年度特定鳥獣(鳥類)に係る保護管理検討調査業務報告書より)
※○は調査実施地点